

「臨幸記念 名家秘藏品展覧会」の開催と鴻池家による秘藏品の出品

中野 朋子

要旨 鴻池善右衛門家から寄贈を受けた服飾に付随する「第二回 臨幸記念 名家秘藏品展覧会」出品の題箋を手がかりとして、昭和八年および九年に開催された「臨幸記念 名家秘藏品展覧会」の開催経緯ならびに昭和七年陸軍特別大演習とそれに伴う大阪への行幸について概観した。また、「臨幸記念 名家秘藏品展覧会」に鴻池家から出品された作品とその伝来について報告するとともに、明治期以降の鴻池家における染織・服飾品の展覧への出品履歴についても言及した。同時に明治後期から昭和戦前期にかけての美術工芸史研究を進める上で、今後注目すべき着眼点も提示した。

はじめに

大阪歴史博物館では、平成九年（一九九七）度に鴻池善右衛門家から大阪市へ寄贈を受けた服飾ならびに染織資料を保管している（以下、「鴻池家資料」という）。それらは概ね十八世紀中葉から十九世紀末頃までの間に同家で使用されたと推定される資料群であるが、その服飾資料のうち「茶地松皮菱取りに秋草文刺繍小袖」（写真①）、「紅地流水に遠山桜文刺繍打掛」（写真②）ならびに「紙子羽織」（写真③）の三作品に、幅八・四センチメートル、長さ三十八・四センチメートルの和紙製題箋が附属している（写真④）。「第二回 臨幸記念 名家秘藏品展覧会」の角印が捺された題箋であ

る（写真⑤）。鴻池家は昭和十五年（一九四〇）の「松筠亭藏品」の売立によつて「鴻池名物」と呼ばれる美術品を世に出したことはよく知られている。じつは、売立より以前の時期にも同家が所蔵する美術品はさまざまな展覧会に出品されていたことが鴻池合資会社資料室に残される記録類から把握可能であるものの、現存記録類の中には「第二回 臨幸記念 名家秘藏品展覧会」への出品記録は見あたらない¹⁾。

明治期から昭和戦前期にかけての大阪は美術振興を目的として「名家」などによる「秘藏品」の公開や芸術奨励活動が比較的盛んに行われていた時期にあたる。そのことは、明治二十四年（一八九一）十一月に設けられた「日本美術協会大阪支会」の規則である「日本美術協会大阪支会規則」

第一章目的第一条に「本会ノ目的ハ本邦ノ美術ヲ振興スルニ有リ」と明示されていることから読み取れる。日本美術協会大阪支会の会員は「名誉会員」以下「特別会員」「奨励会員」「通常会員」の四種に区分され、このうち「奨励会員」は「毎月壹円ヲ納ムルモノトス」(第七条)と定められていた²⁾。大阪歴史博物館に残る「日本美術協会大阪支会奨励会員名簿」(写真⑥)は平瀬亀之輔が同支会会長を務めた時期の名簿であるが、それによると、当時の奨励会員数は一七九名を数えており、当時大阪の政財界に名を知られる人々がその名を連ねている。同様に、昭和九年(一九三四)五月に大阪城天守閣を会場に社団法人大阪府工芸協会設立十周年記念のため大阪における故工芸技術者及び工芸助長功労者の追彰式の挙行にあたり編纂された「郷土名工並助長奨励功労者小伝」を見ると、「名工」として追彰された職人が六十四名、「工芸助長奨励功労者」二十一名の名が挙げられており³⁾、明治後期から昭和初期にかけての大阪における美術振興の盛んな様子が理解される。

では「第二回 臨幸記念 名家秘蔵品展覧会」は、そうした大阪の美術振興を背景にして開催された展覧会であるのか、臨幸の時期はいつか、「名家」とはいかなる家々か、そうした疑問点をひとつずつ解明しながら、大阪における美術品展覧の実態について検討していくこととしよう。

(一)「臨幸記念 名家秘蔵品展覧会」の開催と昭和天皇の行幸

冒頭で紹介した「第二回 臨幸記念 名家秘蔵品展覧会」とは如何なる展覧会であったのか。その開催経緯と内容から紐解いていく。

(1)「臨幸記念 名家秘蔵品展覧会」開催の契機

まず「臨幸記念 名家秘蔵品展覧会」(以下、「第一回名家秘蔵品展」「第

二回名家秘蔵品展」という。)の記録として刊行された二冊の『臨幸記念名家秘蔵品展覧会図録』⁴⁾を手がかりにして検討を行っていく。そのうち、第一回展覧会の巻末に当時の社団法人大阪商工協会長小畑源之助の筆による跋文が収録されている⁵⁾。これによれば、昭和天皇は昭和七年(一九三二)十一月に挙行された陸軍特別大演習(以下、「大演習」という)の統監後「特に産業御奨励の御思召を以て大阪府貿易館に親臨」した。当時「商都」と呼ばれた大阪はその経済力を背景として「燦然たる町人文化を建設して全国に覇を唱え、永年培ひたる商工の富力」をもつてして「芸術の粹を各地より蒐集」した結果「工芸美術の発達と精神文化の向上に寄与するところ」があつたが、これらの古美術品は蒐集以来「名門旧家に伝統珍藏せられたが門外不出」となり、「容易に鑑賞の機を与へられ」なかつた。しかし、昭和天皇の大阪府貿易館への親臨という機会を得たことで「御臨幸を記念すべく、両者共同主催の下に、名家秘蔵品展覧会の開催を企て名門諸家に談じて其の秘蔵家宝の出陳を請ひ」実現した展覧会が「第一回名家秘蔵品展覧会」であつたという。しかも「御臨幸後他に使用せず、清浄そのものゝ如き館内に展列し、稍もすれば現代に墮せんとする大阪の天地に、古代芸術の精華を憧憬するの機会を与えん」の気概で実現したという。本展の会期は昭和八年(一九三三)二月十日より十六日までの七日間で、「公開期間中、愛好家並に斯道研究者の来りて鑑賞するもの三千余名に上」り、公開された「珍宝」は「総数二百余点、階上階下にこれを陳列して、未曾有の盛観を整ふるを得」、「社会を裨益し文化に貢献せし処のもの頗る大」であつたという。

昭和八年の「第一回名家秘蔵品展」の成功を受け、翌九年(一九三四)に第二回目の「臨幸記念 名家秘蔵品展覧会」(以下、「第二回名家秘蔵品展

覧会」という)が開催された。「第二回名家秘藏品展覧会」の跋文によると、日本は昭和八年の国際連盟脱退以来、世界から孤立を深めるなかで、昭和天皇の第五子として「皇太子殿下」つまり今上天皇が誕生した、という慶事に「大阪府立貿易館に於て、大阪博物場と大阪商工協会の共同主催で、臨幸記念第二回名家秘藏品展覧会を開催し、新たに聖蹟を偲び、また今次の御慶瑞を祝し奉り、併せて二千年の歴史ある浪花の文化を顕揚したいと企て」ての展覧会開催であり、その出品数は二百七十点を数えた⁶⁾。

「第一回名家秘藏品展」には、村山龍平氏、上野精一氏、野村徳七氏、山口吉郎兵衛氏、藤井善助氏、男爵鴻池善右衛門氏、阿部房次郎氏、弘世助太郎氏、男爵住友吉左衛門氏(掲載順)の九家と博物場が、翌年開催された「第二回名家秘藏品展覧会」には、磯野家、野村家、山口家、藤井家、鴻池男爵家、阿部家、弘世家、住友男爵家(掲載順)の八家と博物場が出品している。二冊の『名家秘藏品展図録』からは、各家から出品の「秘藏品」は、第一回、第二回ともに日本あるいは中国の工芸作品や絵画が主軸となっていることも読み取れる。⁷⁾

ここから「名家秘藏品展」開催の契機となった大演習について概略を振り返っておくことにしたい。

(2) 昭和七年陸軍特別大演習の挙行と昭和天皇行幸

昭和七年(一九三二)十一月、大阪において陸軍特別大演習が舉行された。本大演習の挙行にあたり、昭和天皇は統監のために大阪へ臨幸、十一月十日から十七日まで大阪城内に滞在した。昭和天皇は滞在期間中府内各地への巡視を実施、十一月十六日の大阪府立貿易館(以下、「貿易館」という)への臨幸もその一環であった⁸⁾。貿易館の前身は明治二十三年(一八

九〇)十一月十五日に設立された大阪府立商品陳列所(以下、「商品陳列所」という)で、前年三月に大阪府知事として着任した西村捨三(一八四三〜一九〇八)⁹⁾の発案により貿易斡旋を目的に北区堂島浜通二丁目(現在の北区堂島三丁目田蓑橋北詰)に創立された。商品陳列所規則によると、同所は「通商貿易ノ発達、工芸技術ノ改良、發明考案ノ奨励、産業常識ノ普及、商品広告ノ研究等総テ商工業ノ発達進展ヲ図ルヲ以テ目的トシ」(第一条)、主に日本国産物の輸出を増進するとともに外国品輸入の便利をはかること、国内商業の発達を助けるとともに府下の工業の拡張改良などを掲げ設置された。それらの目的達成のために、商品陳列室、荷造法参考室、広告室、図書室、分析室を設置し、参考品の陳列、海外事情通信員の設置と海外商情の視察、定時または臨時の機関誌・報告書の作成、陳列諸会の開催、参考品の出張陳列、講演会の開催、商品広告の研究、産業知識の涵養、分析試験の受託、陳列品の府下営業者への貸渡または分与の実施などの広汎な事業を行うとともに、基本的には午前九時より午後四時までの毎日、有料で公衆の縦覧が許可された。その運営にあたっては、商務課、調査課、陳列課、図案課、図書課、総務課の六課が置かれた。

ところが、明治四十一年(一九〇八)七月三十一日に発生したキタの大火によって商品陳列所は類焼してしまう。焼け跡に仮事務所を設けて調査事務を行ったが商品陳列所の再建には時間を要し、東区内本町橋詰町の府立大阪博物場内へと移転、落成は大正六年(一九一七)三月十五日のことであった¹⁰⁾。

移転先となった博物場は、江戸時代に西町奉行所が置かれていた場所に明治八年(一八七五)四月に設置され、明治十七年(一八八四)には府立大阪博物場と改称、以後敷地を拡張事務所、陳列所、美術館、動物園など

を併設、宮内省御物や寺社宝物の展観などを盛んに行っていた⁽¹¹⁾。この博物場内に商品陳列所を併設することで、従来の商品改良や産業発展に関わる事業を商品陳列所が、展示会・品評会などの陳列事業は博物場が行うこととなった。また、移転後の商品陳列所は積極的に海外事務所を展開、貿易振興へと注力していったのである。

博物場内に移転した商品陳列所を初めて訪問した皇族は当時の摂政宮、つまりのちの昭和天皇で、大正十四年（一九二五）五月十九日のことであった。二度目は昭和四年（一九二九）六月六日に大典記念の行幸に際して、そして三度目が大演習での台臨となったのである⁽¹²⁾。

『大阪府記録』によると、大演習での臨幸が行われた十一月十六日の進行は次のようなものであった。

午前十一時八分、府工業奨励館への臨幸を終えた昭和天皇の御料車が貿易館に到着、花岡館長以下の出迎えを受けた。御便殿で休憩ののち、府知事より大阪府下の貿易に関して概要説明を受け、館内へ出発。貿易館で天覧された品は府下六百二十九人が出品した輸出入関連製品で総数千七百五十九点、ほかに大阪府下の歴史的貿易資料なども併せ陳列された。昭和天皇はそれらの説明を受け、時折「御下問ヲ賜リ」ながら「長時間ニ亘リテ御熱心ナル御態度ヲ以テ仔細ニ御巡覧」したのち、午後零時五分に還御した。

（3）昭和七年の大阪臨幸における「天覧」の実施

ところで、陸軍特別大演習においては、行在所第一・第二講堂において物産が、府庁高等官食堂においては府勢に関する図表・写真および関連品が、府立堺中学校講堂においては府下学校生徒の製作品が「天覧」されて

いる。特に行在所において天覧された工芸品は「イ、金工品ノ部」二十四点、「ロ、漆工品ノ部」十二点、「ハ、木竹工品ノ部」二十八点、「ニ、彫刻品ノ部」六点、「ホ、窯業品ノ部」五点、「ヘ、紙工品ノ部」四点、「ト、染織品ノ部」十点、「チ、小間物ノ部」七点の計八項目九十六点に及び（詳細は〈表③〉昭和七年陸軍大演習 行在所天覧品（工芸品）を参照のこと）、そのうち二十六点が天皇家の「御買上」となっている⁽¹³⁾。参考までに昭和四年（一九二九）に昭和天皇が大阪へ臨幸した際の天覧品の区分と出品点数を見てみると、工芸品は「一、金属工芸」三十三点、「二、髹漆工芸品」十九点、「三、彫刻工芸品」十二点、「四、木工芸品」二十一点、「五、竹工芸品」十一点、「六、窯炉工芸品」十六点、「七、小間物工芸品」十四点の七項目百二十六点が出品され、うち十一点が買上品となった⁽¹⁴⁾。両者を比較すると、昭和四年の天覧に比べ昭和七年の天覧は工芸品の出品が約二十四％減少していること、出品項目のうち、昭和四年には区分されていた木工芸品と竹工芸品が統合さよびれ、木竹工ノ部とされていること、新たに紙工品ノ部、染織ノ部が創設されていることが理解される。

以上、第一章では「臨幸記念 名家秘蔵品展覧会」の開催概要と昭和七年に挙行された陸軍特別大演習ならびに昭和天皇による大阪への行幸とそれにとまなう「天覧」について簡潔に報告した。このうち特に注目しておきたいのは陸軍特別大演習の行在所における「天覧品」で、工芸部門の出品者の多くは大阪の近代工芸、特に昭和戦前期の美術工芸の担い手と考えてよい工芸家であり、他の博覧会や美術工芸団体での活躍が把握できている製作者も多く見いだされる点である。彼らの活動実態等については稿を改めて報告することとし、第二章においては「臨幸記念 名家秘蔵品展覧会」への鴻池家からの出品に関して、詳細に検討していく。

(二)「臨幸記念 名家秘藏品展覧会」への鴻池家の出品

(1)「第一回名家秘藏品展」への出品と作品の詳細

すでに第一章第一節で述べたとおり、「第一回名家秘藏品展」は昭和八年(一九三三)二月、大阪府立貿易館を会場として、大阪府立貿易館、府立大阪博物館、社団法人大阪商工協会の共催で開催された展覧会であった。残念ながら、鴻池合資会社に残された資料中に「名家秘藏品展」への出品記録は確認できないため、「第一回名家秘藏品展」の図録から鴻池家の出品について考察することとする。

同展図録によれば、鴻池男爵家は「第一回名家秘藏品展」に「名物裂」を出品、「書付」一枚、裂筆筒一棹、文庫一合、名物裂二十三種、茶入一種の写真が十六頁にわたり掲載されている⁽¹⁵⁾。図録掲載作品のうち、裂筆筒に収蔵されていた名物裂と「書付」、そして裂筆筒一棹(写真⑦)は、近年個人の所蔵するところとなっている。そこで作品の現状を確認すると、図録に掲載された名物裂二十三種のうち、裂筆筒収納品として伝存している作品は二十種、裂筆筒にはほかに六十七種が伝わるため裂筆筒への収納総計は八十七種を数えること、さらには図録掲載写真からは「書付」と見えるものはじつは「筆筒袋切目録」という冊子の奥書であること、「筆筒袋切目録」の内容と現存作品の内容が合致していることなどが把握できた。この結果を踏まえ(表④)「第一回名家秘藏品展」鴻池家出品作品一覽》を作成し、図録に掲載された名物裂のうち名称の判明したものについても明示したので参照いただきたい。

続いて裂筆筒と名物裂の伝来について知るために目録の奥書を読み解くこととしよう。(以下、読み下し文中の「」は改行箇所を示す)

「筆筒袋切目録」奥書

宝暦之頃宗知居士／御調被為果候目／録書其後品数相加／候上手数相立見紛／敷相成候二付書改候也
文政五壬午年季秋／山中幸澄
筆者／幸年

これによれば、「筆筒袋切目録」の作成時期は文政五年(二八二)秋、目録の作成指示を出したのは鴻池家八代当主幸澄(一七八五〜一八三四)、目録の筆者は幸年となっている。記載内容からは、幸澄による目録に先行して、宝暦年間(一七五一〜一七六四)に宗知居士こと五代当主宗益が名物裂を調べ作成した目録の存在が想定される。また「其後品数相加候」とされていることから推して現存作品の総てが宝暦年間までの蒐集品ではないこと⁽¹⁶⁾、「年数相立、見紛敷相成候」とあることから、五代宗益によって作成された目録は年数を経て蒐集品が増えたことよって見紛らわしくなっていたため文政五年に目録を改めたという事実も併せ確認できる。

ちなみに、この裂筆筒とは別に鴻池家に伝来し大阪市へと寄贈された染織資料の中にも一〇〇件以上の裂類が含まれている。その特徴としては、いわゆる「今渡裂」「新渡裂」と称される江戸時代以降に輸入された裂類が多いこと、長尺の裂が多く伝来すること、ところどころ大きく切り取られている裂がありその切り取り跡に「文政六年七月」「巾七寸 丈五寸」などの付箋が附されている場合があること、裂を納めた箱に入手年や入手価格が記されたものがあることなど、史料的な意味合いが強く、鴻池家の名物裂蒐集について説明していく上で注目される資料群となっている。

(2) 「第二回名家秘藏品展」への出品と作品の詳細

続いて「第二回名家秘藏品展」への出品について見ていく。「第二回 臨幸記念 名家秘藏品展覧会」は、前述のとおり「皇太子殿下の御誕生」を祝い企画されたもので、大阪府立貿易館を会場に、大阪府立貿易館、大阪博物場、大阪商工協会の三者共催で開催された展覧会である。同展には「二千年の歴史ある浪花の文化を顕揚したい」との意図も含まれ、出品数は二百七十点に及んだ。図録には「第二回名家秘藏品展」の開催期間が明記されていないが、「皇太子」である継宮明仁親王の誕生日が昭和八年（一九三三）十二月二十三日であること、図録の発行日が昭和九年（一九三四）四月十五日であることから推測するに、昭和九年一月から三月にかけての期間に開催されたと考えるべきであろう。

「第二回名家秘藏品展」図録には鴻池家からの出品として服飾品が「男物」「女物」各三点ずつ、合計六点の写真が掲載されており、これらの作品もすでに大阪市へ寄贈されていることが確認できる。

- 男物紙子羽織 裏紅海黄 ヒダ絹縞物 (写真⑧)
- 男物しゝら織紺立縞一重物 揚羽蝶織紋 (写真⑨)
- 女物薄紅縞子遠山ニ桜模様縫打掛 裏紅海黄 (写真⑩)
- 女物茶地絹白縞子松皮菱縫込秋草模様刺繍打掛 (写真⑪)
- 裏紅海黄松皮菱縫込秋草模様刺繍 (写真⑫)
- 女物格子蘭菊純子地斗帳桜模様刺繍打掛 裏紅海黄 (写真⑬)
- 男物茶地絹のしめ衿着物 裏薄水色海黄 (写真⑭)

いずれも江戸後期に仕立てられたと考えられる作品で、注文者や発注先な

どは不詳である。出品作品中には鴻池家の家紋である「五ツ山」を生地に織り込んだ別注品などもみられ、大坂を代表する豪家・鴻池家の家格に相応しい服飾品となっている。

ここまで二度にわたる「名家秘藏品展」への鴻池家からの出品内容を概観してきたことで、鴻池家が「名家秘藏品展覧会」に名物裂と服飾品を出品したのは何故か、同家所蔵の染織品は頻繁に展覧会へ出品されたのか、という疑問点が浮かんできた。次節で考察を加えてみたい。

(3) 明治期以降の染織品の出品

鴻池家では江戸時代以来、茶道具をはじめとするさまざまな道具類の管理を厳密に行ってきた。明治期になると、鴻池家伝来の美術品（道具類）に対しては、さまざまな展観への出品要請が寄せられ、同家ではその要請に積極的に応じていたことも出品記録から把握可能である⁽¹⁷⁾。

鴻池家に現存する最も早い出品記録は明治九年（一八七六）から同三十年（一九〇〇）にかけての記録である「明治九年府立博物場出品之控」⁽¹⁸⁾（鴻池合資会社資料室蔵）、これに続くものが先に挙げた「明治三十六年一月調 博覧会出品扣 執事」である⁽¹⁹⁾。但し、これらの二資料には染織品の出品に関する記載は見受けられない。

ほかに「明治三十五年 八番蔵道具出入扣 執事」⁽²⁰⁾（鴻池合資会社資料室蔵、以下「八番蔵道具出入扣」という。写真⑭）、「明治三十六年一月調 博覧会出品扣 執事」⁽²¹⁾（鴻池合資会社資料室蔵、以下「博覧会出品扣」という。写真⑮）、「大正十二年 展覧会出品目録」⁽²²⁾（鴻池合資会社資料室蔵）⁽²³⁾等、複数の出品記録が保管されているが、このうちで染織品の出品に関わる記録は「八番蔵道具出入扣」および「博覧会出品扣」に確認できる。年代順

に内容を見てみよう。明治維新後初めて名物裂に関する記載が登場するのは「八番蔵道具出入扣」で、次のような内容である(写真⑯)。

明治四十年四月十九日

東千原^⑰

一 裂鑑箆筒小 老棹

右瓦別邸江本日より来訪之井上伯へ御一覽之為出ス

立会開庫 芦田支配人平井執事

「瓦別邸」とは鴻池家の瓦屋橋別邸、「井上伯」は明治三十五年(一九〇二)五月から鴻池家および事業の監督を委託されていた井上馨(一八三六〜一九一五)、「芦田支配人」は明治四十年(一九〇七)一月二十八日付で鴻池銀行の理事兼支配人に就任した芦田順三郎のことをさす^⑳。つまり、鴻池家の所有する瓦屋橋別邸に明治四十年四月十九日より滞在する井上薫侯爵に「裂鑑箆筒小 老棹」をみせるために取り出した、その開庫には鴻池銀行の芦田支配人と平井執事が立ち会った、というのである。

この時の「裂鑑箆筒小」の開庫は一般的な展覧会への出品とは性格が異なり、井上馨に見せるためだけに取り出したものである。明治四十年は、鴻池家十一当主の幸方自らが井上を招聘し、鴻池家の経営改革が早急に進められている時期にあたる^㉑。また、鴻池家の家と事業双方の監督を行う立場にあった井上馨は「世外」の号でも知られる美術品蒐集家で、美術振興にも尽力したことは良く知られるところだ^㉒。井上からの要請があったか否かについては記述がなされないものの、鴻池家は「裂鑑箆筒小」をわざわざ瓦屋橋の別邸に運び、井上馨に閲覧させたのである。

ところで、この記録を読むと次のような疑問点が生じる。

ア、「裂鑑箆筒小」はどの作品群に該当するものか

イ、「裂鑑箆筒小」の他に「大」が存在するのか

ウ、「第一回名家秘藏品展」出品の裂箆筒と同一作品であるか

ア、イのいずれの項目も、記録に詳細な記載が含まれていない以上検証は難しい。ただし、井上馨への閲覧の際の立ち会い記録からは「裂箆筒小」を厳重な管理下に置いて特別に開庫したことが読み取れる。ウについても、明治期以降で「裂鑑箆筒」の出入に関する記録は本件が唯一のものであり、内容の詳述もなく、また写真等の傍証資料もないことから、検証は難しい。

江戸時代後期まで遡れば、天保五年(一八三四)の「道具虫干帖」(鴻池合資会社資料室蔵)「六月十九日晴天」条に「桐文庫切類」と極簡潔な虫干しの記載がある^㉓ものの、それが「第一回名家秘藏品展」出品の裂箆筒や「八番蔵道具出入扣」の「裂鑑箆筒」と同一であると断定することは困難である。かつて鴻池家には「裂箆筒」を含むその他の名物裂が多数蒐集されていた^㉔ことを考えれば、「第一回名家秘藏品展」出品の裂箆筒が「八番蔵道具出入扣」に記載の「裂鑑箆筒」とは別の箆筒であった可能性も念頭に置かなくてはならない。いずれにしても該当するであろう「裂鑑箆筒」はすでに鴻池家を離れてしまっており、検証することは困難である。

続いて「博覧会出品扣」の記載を見ておこう。「博覧会出品扣」自体は明治三十六年(一九〇三)から大正十四年(一九二五)まで用いられた出品控え帳で、ここには服飾品の出陳に関する記載がある。(写真⑰)

一 襦褌三枚 金時画文庫二入

但 樺色地紋綸子老杖 熨斗目織朱子腰熨斗目老杖

紋綸子疋田絞縫袷枚 〆三枚

一 御定紋散シ金蒔絵衣桁 袷組入 袷箱

〆 裨襠入文庫共合テ参点 (朱書) 無事同八月十八日戻ル

〔上部割書〕

前同断

婦人館／婦人部／出品但是ハ／同委員江戸／堀高等女学／校長畠田／繁太郎氏へ渡ス

つまり、「裨襠三枚」を「文庫」に入れて「定紋散シ金蒔絵衣桁」とともに出品したというもので、服飾品の出品記録として確認できる最も早いものである。出品に際しては大阪府立江戸堀高等女学校校長畠田繁太郎へ渡している。江戸堀高等女学校は明治四十四年（一九一〇）三月に江戸堀高等女学校として創立され、同年四月西区の大阪市立第一女子手芸学校で開校した。初代校長がここに登場する畠田繁太郎である。大正三年（一九一四）七月に新築中であつた木造校舎が竣工し、西区市岡町（現在の港区波除二丁目）に移転、九月には大阪府立市岡高等女学校と改称している²⁵ので、鴻池家からの服飾品の出品は遅くとも大正三年九月までの間となるが、記事には日付が明記されていない。但し、記事上部の割書に「前同断」とあるので、直前の記事の割書を確認しておく（写真¹⁸）。

大正二年七月／十五日より天王寺公／園内ニテ開会／之大阪府教育／会主催関西／教育博覧会／エ大阪府知事／大久保利和様／之懇請ニ寄／出品ス／大阪府庁より／品受取ニ／参ラレ渡ス

つまり、この出品は大正二年（一九一三）七月十五日から八月十五日まで天王寺公園で開催された大阪府教育会主催の関西教育博覧会への出品であつたことが理解される。同展は日本最初の教育博覧会で、人々の教育への理解を深める行事として広く受け入れられ、出品者は一二八人、出品数は一万九六〇〇余点、入場者数は四四万六二〇〇余人に及んだ²⁶。割書によれば、鴻池家からの出品作品は婦人館に展示されたらしい。関西教育博覧会婦人館の詳細については未詳であるが、明治末期から大正期にかけては、婦人と子供を対象としたの博覧会が多く企画された時期にあたることから、同博覧会においても教育普及を目的として婦人館が設置されたものと考えて良からう。また同博覧会への出品は当時の「大阪府知事大久保利和様」²⁷の「懇請」に寄つて実現したものであつたことも判明する。

出品された「裨襠」は「樺色地紋綸子」「熨斗目織朱子腰熨斗目」「紋綸子疋田絞縫」の三領であつた。このうち「紋綸子疋田絞縫」は鴻池家より大阪市へ寄贈された「赤地几帳文繡絞振袖」（写真¹⁹）であろうと想定できるものの、「樺色地紋綸子」については作品の特定が難しい。また「熨斗目織朱子腰熨斗目」に相当すると考えられる作品は、伝来の「熨斗目小袖」三種（黄地、紺地、茶地）のうちいずれかが該当するものと考えられる。

関西教育博覧会に続き服飾品の出品が確認できるのは、東京日本橋の白木屋で昭和八年（一九三三）十月一日から同月十七日まで開催された「大坂鴻池家 御秘藏品 時代衣裳展覧会 並歴代名家筆末廣陳列会」（以下「時代衣裳展覧会」と呼ぶ）である。一枚刷の出品目録（写真²⁰）が鴻池合資会社資料室に現存する。本展は、昭和八年十月に東京日本橋の白木屋で開催されたもので、出品作品数は小袖類十七領、末廣は三百点に及ぶ。出品目録記載の開催趣旨²⁸によると、展示された「鴻池家御秘蔵の衣裳は、

従来門外不出の逸品で染色・刺繍・縷縷に到るまで趣味と工夫の極致を尽したものの、時代を偲ぶ芸術品として最高権威のもののみ⁽³²⁾だという。「時代衣裳の部」記載の出品作品のうち、十五領が鴻池家所蔵である。このうちには鴻池家より大阪市へ寄贈された作品も含まれ、また「番外」で展示された「京都大村家秘蔵」の二領は、白木屋創業家である大村家に伝来の衣裳であった⁽²⁹⁾。

同時に展観に供された「歴代名家筆末廣」は、鴻池家十代幸富、十一代幸方が熱心に蒐集した扇絵コレクションの一部と考えられる。鴻池家が蒐集した多くの扇面は、戦後、東邦生命社長だった五代太田清藏（一八九三〜一九七七）に譲渡され、現在では太田記念美術館（東京都渋谷区神宮前）に収蔵されている⁽³⁰⁾。

白木屋をめぐるのは、「時代衣裳展覧会」開催前年の昭和七年（一九三二）に二つの大きな出来事が起こっている。一件目は白木屋大阪店の閉店である。白木屋は第五回国勧業博覧会への出品をきっかけとして、明治三十六年（一九〇三）に心齋橋二丁目に呉服店を開業した。大正十年（一九二一）十月には備後町の堺筋沿いに地上九階建の百貨店として移転したが、経営状態が不振に陥り撤退を余儀なくされたのが七月三十一日であった。二件目は十二月十六日午前九時十五分に日本橋店で発生した火災である。日本初の高層建築物での火災として知られるこの火事は、地下二階・地上八階建の建物の四階玩具売り場で発生、四から八階までを全焼して約一万四千平米を焼き、死者十四名、負傷者は約五百名を数える大惨事となった⁽³¹⁾。大火の後、日本橋店は一時営業を止めたが、同年十二月二十四日には再開、翌昭和八年六月に火災後の改装を終えた。「時代衣裳展覧会」が開催されたのはまさに改装直後の昭和八年十月のことである。本展への出品の

背景には鴻池家と大村家との姻戚関係が影響を及ぼしていると考えられるがその詳細は伝わっていない⁽³²⁾。そして、冒頭に挙げた「第二回 名家秘蔵品展覧会」への鴻池家伝来衣裳の出品は、白木屋での「時代衣裳展覧会」への出品の半年後にあたる。

ここまでの出品記録とそれに関連する出来事を年代順に整理しておく。

- 明治三十五年（一九〇二） 五月 井上薫、鴻池家ならびに銀行の監督となる
- 明治四十年（一九〇七） 四月 井上薫に「裂鑑筆筒小 老棹」をみせる
- 大正二年（一九一三） 七月 関西教育博覧会へ服飾作品を出品
- 昭和七年（一九三二） 十一月 陸軍大演習挙行、それにもない昭和天皇が大阪への臨幸
- 同年 十二月 白木屋日本橋店で火災発生
- 昭和八年（一九三三） 二月 第一回「名家秘蔵品展」へ名物裂および裂筆筒を出品
- 同年 十月 白木屋にて「時代衣裳展覧会」が開催、扇面三〇〇点と服飾作品十五点を出品
- 同年 十二月 昭和天皇に皇太子が誕生
- 昭和九年（一九三四） 二月頃 第二回「名家秘蔵品展」が開催、服飾作品六点を出品
- 昭和十五年（一九四〇） 五月・六月 松筠亭蔵品売立

一覧を見ると明らかのように、明治四十年の井上薫への特別公開を除くとこの間の名物裂の公開は「第一回名家秘藏品展」ただ一度のみとなっている。「第一回名家秘藏品展」で公開された名物裂及び裂筆筒には「筆筒裂目録」のほかに昭和八年の年記がある「筆筒袋切入合控」が附属するが、その裏表紙には「山中家宝」との墨書もある。こうしてみると「名家秘藏品展」は昭和七年十一月の昭和天皇の大阪府貿易館への「御臨幸を記念すべく」企画された展覧会であり、まさしく「名門諸家に談じて其の秘藏家宝の出陳」を実現するという企画意図に添い、鴻池家は男爵家としての家格に相応しい「家宝」の名物裂を昭和八年二月の展覧会に出品したと考えておきたい。

また、現在確認できる服飾品の一般公開は三度に及ぶ。初公開と考えられる関西教育博覧会への出品は当時の大阪府知事自らの懇願によつて実現した。以後しばらく服飾品の出品記録は途絶えたが、昭和八年から九年にかけての約半年の間に二度の出品要請に応じている。この後、出品の記録に服飾品は確認できなくなり、鴻池家伝来の服飾品は平成九年度に大阪市へ寄贈されたのであった。

まとめ

「第二回 臨幸記念 名家秘藏品展覧会」出品作品の題箋を手がかりとして、同展覧会の開催経緯ならびに出品作品に関して調査を進め、「第一回 臨幸記念 名家秘藏品展覧会」は商都大阪の経済力を背景として蒐集され門外不出となった大阪の名家の美術品を昭和天皇の大阪府貿易館への臨幸を記念するという題目の下に一般公開させた画期的な展覧会であったこと、

「第二回 臨幸記念 名家秘藏品展覧会」も昭和天皇の皇太子誕生という慶事を題目に企画されたことについて報告した。この二度に亘る「名家秘藏品展覧会」は、名家側としても、天皇の臨幸を記念する、あるいは皇太子の誕生を記念する、という題目の展覧会への出品に応じることは「社会を裨益し文化に貢献」するまたとない機会として捉えられ、結果として多くの作品が展覧に供されることとなったのであろう。

ところで、今回の考察を進めたことによつて、昭和戦前期における美術工芸史研究を進める上で注目していきたい新視点が浮上してきたので本稿の締めくくりとして指摘しておく。それは明治後期から昭和戦前期における天皇家の行啓幸にともなう美術工芸作品の「天覧」あるいは「親覧」と美術工芸の振興との関係についてである。

天皇家による地方への行啓幸、特に戦前の天皇による行幸は、政治色あるいは軍事色の強い重要な天皇による行事として公式な記録が残される場合が多い。それらの記録には行幸先で「天覧」されたさまざまな物品の一覧が収められており、その分析を行うことで当時の美術工芸界の実情を的確に把握することができると考えられる。美術工芸分野に限定すれば天覧品の作者は現在でもその名が知られる人物が多いが、なかには現在ではその製作作品の把握さえ難しい作者も少なからず含まれている。次第に軍事色が強まっていくなかで頻繁に実施された軍事演習に伴う行幸と「天覧」の記録に見える美術工芸作品に関する記録は、展覧会の機会が減少していく時期にあつては、当時の美術工芸界の製作実態を探る上で貴重な研究材料となるだろう。つまり、昭和戦前期までの美術工芸作品と製作者については、明治時代以降頻繁に開催された博覧会、団体あるいは政府が主催する美術展覧会において評価された工芸作品にばかり目を向けるのではなく、

新たに天皇による行幸と「天覧」の関連性にも注目し検証していくことで、美術工芸研究を一層深化することができると考えており、その観点からの研究成果については、稿を改めて報告する。

註

(1) 『豪商鴻池―その暮らしと文化―』、大阪歴史博物館編、東方出版社発行、二〇〇三年

(2) 「日本美術協会」は明治二十年(一八八七)十二月に結成された(山崎剛「日本美術協会大阪支会資料」、『大阪市立博物館研究紀要』第二十七冊、一九九五年)。「日本美術協会大阪支会奨励会員名簿」には、「陶磁器」部門の技藝員として「藪明山」の名が挙げられている。「明山藪政七履歴」(大阪歴史博物館蔵)によれば、明山が日本美術協会大阪支会の技藝員となったのは明治三十年一月のことであるから、本資料は同時期以降のものと考えられる。

(3) 「郷土工並助長奨励功勞者小伝」(大阪城天守閣蔵)による。

(4) 第一回、第二回の「名家秘藏品展覧会」の記録は『臨幸記念名家秘藏品展覧会図録』として、発行されており、大阪府内の公共図書館、大学図書館を中心に数館に所蔵されている。本稿では大阪府立中之島図書館蔵本を使用する。『臨幸記念名家秘藏品展覧会図録』、大阪商工協会・大阪府貿易館・府立大阪博物館編纂、三丘社発行、一九三三年

『臨幸記念名家秘藏品展覧会図録 第二回』、大阪商工協会・大阪府貿易館・府立大阪博物館編纂、藝苑社発行、一九三四年

(5) 第一回展図録に掲載の跋全文は以下のとおり(表記は現代仮名遣いに改めた)。なお、「地方功勞者」として十一月十五日に開催された天皇との陪食に列した人物の氏名の前には筆者が○を附した。

「臨幸記念 名家秘藏品展覧会」図録 跋文

昭和七年十一月 天皇陛下大轟を大阪の地に進めたまひ 陸軍特別大演習御統監後 特に産業御奨励の御思召を以て 大阪府貿易館に 親臨あらせらる我商都の民たるもの恐懼感激其措く処を知らざる次第であった。

惟ふに大阪の地たるや 仁徳帝の奠都以来 茲に千六百有余年 其の間断えざる努力は 燦然たる町人文化を建設して全国に覇を唱え 永年培ひたる商工の富力は 芸術の粹を各地より蒐集し 錙銖の間 能く工芸美術の發達と精神文化の向上に寄与するところ多大なるものがあつた 斯くて是等の古美術品は 名門旧家に伝統珍藏せられたが 門外不出 容易に鑑賞の機を与へられず 吾人は之を以て大なる遺憾とした

茲に於て 大阪府立貿易館と姉妹関係にある府立大阪博物館 並に社団法人大阪商工協会は 今次の御臨幸を記念すべく 両者共同主催の下に 名家秘藏品 展覧会の開催を企て 名門諸家に談じて其の秘藏家宝の出陳を請ひ御臨幸後他に使用せず 清浄そのものゝ如き館内に展列し 稍もすれば現代に随せんとする大阪の天地に 古代芸術の精華を憧憬するの機会を与えんとし 昭和八年二月十日より十六日迄の間広く一般の鑑賞にこれを供した 則ち

○村山龍平氏 上野精一氏 ○野村徳七氏

○山口吉郎兵衛氏 藤井善助氏 男爵鴻池善右衛門氏

○阿部房次郎氏 弘世助太郎氏 男爵住友吉左衛門氏

の諸家に於いて何れも其の秘笈を開き 欣んで稀代の珍宝を出陳せられ 之に大阪博物館の所藏品を加へて総数二百余点 階上階下にこれを陳列して 未曾有の盛観を整ふるを得た 実に斯挙たるや大阪に於ける嚆矢にして 其の一週日の公開期間中 愛好家並に斯道研究者の来りて鑑賞するもの三千余名に上り 社会を裨益し文化に貢献せし処のもの頗る大にして 協賛せられし諸名家に対し衷心感謝に堪へざるところである 本図録はこの展覧品の一部を収載せるものにして 其総てを悉くす能はざるは遺憾とするところなるか 之によりて本展覧会の盛挙を伝へ 御臨幸の栄

沢を永く記念することを得ば 主催者の本懐之に過ぎるものはない
尚本図録題簽は小畑大阪商工協会長の筆になるもの 併せて録す

昭和八年二月

府立大阪博物館長 花岡芳夫

社団法人大阪商工協会長 小畑源之助

(6) 第二回展図録に掲載の跋全文文は以下のとおり(表記は現代仮名遣いに改めた)。

「臨幸記念 第二回 名家秘藏品展覧会」跋文

目下我が国は非常の難局に遭遇し、上下緊張して居るの時、畏くも 皇太子殿下の御誕生を拝し、九千萬の国民は皇国の前途に一大光明を仰ぎ、喜び極まって、手の舞ひ足の踏むところを識らざる有様である。

この折に際し、大阪府立貿易館に於て、大阪博物館と大阪商工協会の共同主催で、臨幸記念第二回名家秘藏品展覧会を開催し、新たに聖躅を偲び、また今次の御慶瑞を祝し奉り、併せて二千年の歴史ある浪花の文化を顕揚したいと企てたのである。

惟ふに昭和七年の秋、聖駕大阪府立貿易館に臨幸あらせられ、御親しく府下の物産を嚮せられた。我らはこの光栄を記念するために、昨春第一回の名家秘藏品展覧会を開催し、名門諸家より古名宝の出陳を請ひ、これを公開して、広く市民に、浪花文化の由来を回顧し又本邦古芸術を賞玩するの機会を与えたのであった。本年更に其第二回を開催し、前年の諸名家その他につき重ねて秘笈を開かれんことを懇望して欣諾を得、その数実に二百七十点、而して出陳者の芳名は

磯野家 野村家 山口家 藤井家 鴻池男爵家 阿部家 弘
世家 住友男爵家 大阪博物館(イロハ順)

を数へ、展覧品は何れも門外不出の稀宝珍玉であつて、光彩陸離、東洋芸術の精華を一堂に蒐展するの盛観を呈した。かくして、我が商工都市に於ては容易に求め難き文物観賞の機会を重ねて提供し得たことは、主催者として頗

る光栄とし、出陳諸名家に対して深く感謝の意を表する次第である。

たゞ本図録の規模小にして、諸家出陳の一部を採録するに止まつたことは甚だ残念であるが、以てその盛観の一端を後年に伝ふることが出来たならば、自他のために寔に欣幸の至りである。

昭和九年四月

府立大阪博物館長 花岡芳夫

社団法人大阪商工協会長 小畑源之助

(7) 展覧会に出品した各家の蒐集品について、現在の所蔵状況等について把握、検討していく必要があるが、紙幅に限りがあるので稿を改めることとする。出品各家によつて設立された博物館施設の名称、または各家からの博物館等への作品寄贈の状況については(表①博物館施設の設立と「コレクション」の寄贈)ならびに(表②「臨幸記念 名家秘藏品展覧会図録」にみる出品作品のカテゴリ)を参照のこと。

(8) 『昭和七年陸軍特別大演習並地方行幸大阪府記録』(以下、『大阪府記録』という)大阪府編・発行、一九三四年

(9) 一八八三年第四代沖繩県令、一八八九年第六代大阪府知事に就任した。

(10) 『八十年の歩み』、大阪府立貿易館編・発行、一九七〇年

(11) 博物館の実態は把握しきれいていない部分が多いが、後々田寿徳氏によれば、博物館は、その組織や施設などを縮小しつつ昭和二十年までは同地に存続し、この年三月の大阪大空襲で焼失したという。(後々田寿徳「大阪博物館―「樂園」の盛衰」、『東北芸術工科大学紀要』第十六号収載、二〇〇九年)

(12) 前掲『八十年の歩み』による。

(13) 天覧品ではないが「御買上」となった五点は含まない。

(14) 註(8)参照。

(15) 図録掲載作品はすべて鴻池家を離れているが、手放された時期については現在のところ未詳である。少なくとも昭和十五年の「松いん筠亭藏品」の売立には作品名は見えない。

(16) 名物製の蒐集は五代宗益以降も継続されていたことが理解されるものの、その詳細は未詳である。

(17) 註(1) 参照。

(18) 「明治三十六年一月調 博覧会出品扣」は標題にあるとおり、明治三十六年(一九〇三)に大阪で開催された第五回内国勸業博覧会を期に記帳が開始された出品記録で、大正十四年(一九二五)五月まで使用された。

(19) 本資料は大正十二年(一九二三)に大阪三越呉服店で開催された「大阪文化史蹟展覧会」の出品に関する記録である。資料からは、展覧会には鴻池善右衛門家に加え和泉町の鴻池新十郎家所蔵品も同時に出品されたこと、鴻池家からの出品は同家伝来の美術品、家の歴史を顕彰する歴史史料が展覧に供されたことが判明する。

(20) 『鴻池家年表』鴻池統男著、廣山謙介監修、鴻池合名会社発行、一九九一年(21) 鴻池銀行の設立は明治三十年(二八九七)三月。この年五月には「家政改革」を試み、翌三十一年(一八九八)十二月、江戸期以来継続されてきた「鴻池家憲法」を改定、さらに三十二年(二八九九)一月、満を持して「家政改革」を発令し、享保期以来続いた別家制度を廃止した。この改革をより一層進めるため、三十五年(一九〇二)に招聘されたのが井上馨であった。

(22) 『世外井上公伝 第5巻』井上馨侯伝記編纂会著、内外書籍、一九三四。
(23) 註(1) 参照。当時の鴻池家当主は七代幸栄(一七六七〜一八〇四)であった。

(24) 本稿第二章第一節参照。

(25) 「大阪府立市岡高等女学校校舎新築落成記念誌」大阪府立市岡高等女学校編、大阪府立市岡高等学校六の花会、一九三七年

大阪府立市岡高等女学校・大阪立港高等学校同窓会「六の花 WEB」
(<http://www.ghana.com/boko/index.html>)

(26) 『新修大阪市史』第六巻、大阪市、一九九四年

(27) 割書には「大久保利和」とあるが、実際に「大阪府知事」に着任したのは、

大久保利通の三男で第十四代大阪府知事を務めた大久保利武(一八六五〜一九四三)で、府知事在任は一九一二年十二月三十日から一九一七年十二月十七日までであった。記録に名前がある大久保利和(一八五九〜一九四五)は

利武の長兄(のちの養父)であるが大阪府知事に在任した事実はない。『講談社 日本人名大辞典』、上田正昭ほか著、講談社、二〇〇一年。『新編日本の歴史』、歴代知事編纂会編、歴代知事編纂会、一九九一年)

(28) 出品目録に記載の開催趣旨全文は以下のとおり(文字は現代語に改めた)。

鴻池家御秘蔵の衣裳は、従来門外不出の逸品で染色・刺繍・縵縵に到るまで趣味と工夫の極致を尽したもので、時代を偲ぶ芸術品として最高権威のもののみであります。

之と同時に展覧に供する 歴代名家筆の末廣 は実に国宝にも準ずべき名画揃ひ、鴻池家御秘蔵の末廣三千点の内、未だ世上に示されなかつた、絶品三百点を選び陳列致します。

猶会場狭隘の為末廣は会期中陳列変えして御高覧に供します。
(29) 明細は以下のとおり。作品名の下に○印があるものは大阪歴史博物館所蔵品、△は「第二回名家秘蔵品展」出品作品と推定されるものを示す。

時代衣裳の部

- 一、小葵唐花唐織打掛 裏紅塩瀬(若松に霞模様) ○
- 一、朱珍打掛 裏紅の壁塩瀬(紺地に蘆の模様) ○
- 一、黒地塩瀬打掛 裏紅壁塩瀬(梅に霞の織出し模様) ○
- 一、鼠色壁塩瀬打掛 裏紅綾羽二重(若松に牛、秋草に灌模様) ○
- 一、紅八ツ橋掛下 裏紅糸よし絹(霞に千羽鶴)
- 一、紋壁小袖 裏紅糸よし絹(牡丹の模様)
- 一、紫塩瀬打掛 裏納戸朱子(霞に藤花模様、刺繍文字ちらし) ○
- 一、鬱金綸子掛下 裏紅糸よし絹(絞と刺繍の丸文模様)
- 一、紅紋綸子掛下 裏紅糸よし絹(絞と刺繍の御所解模様)
- 一、紺朱子打掛 裏紅糸よし絹(刺繍四季模様)

- 一、色絹しぢら小袖 裏紅糸よし絹（老松模様）
- 一、茶地糸織打掛 裏紅糸よし絹（秋草刺繍模様）
- 一、鬱金編子打掛 裏紅糸よし絹（絞と刺繍のいれ子模様）
- 一、紅朱子打掛 裏紅糸よし絹（遠山に桜の刺繍模様）
- 一、唐織掛下 裏紅糸よし絹（五色横段亀丸ちらし）
- 番外（京都大村家秘蔵）
- 一、黒羽二重留袖 二枚重（簾の模様）
- 一、黒塩瀬打掛 裏紅糸よし絹（名物裂模様）
- (30) この譲渡は鴻池家十三代当主正通（一九一四〜一九九三）と五代太田清藏の長女禮子（一九二二〜一九八一）との婚礼が縁となっている。太田記念美術館に所蔵される鴻池家旧蔵の扇絵の一部は、平成二十二年に大阪市立美術館で開催された特別展「鴻池コレクション扇絵名品展」でも公開された。
- (31) 『白木屋三百年史』白木屋編・発行、一九五七年。
- (32) 明治二十九年（一八九六）二月、鴻池家十代当主幸富五女・内（一八七〇〜一九四三）と白木屋の十代大村彦太郎（一八六九〜一九二七）とが結婚し、大村家と鴻池家の間で姻戚関係が生じた。
- 〔附記〕末筆となりましたが、本稿の執筆にあたり、鴻池家資料のご惠贈を賜りました十四代鴻池善右衛門様、資料調査ならびに写真掲載をご許可いただきました鴻池合資会社資料室ならびに大阪府立中之島図書館、貴重なご所蔵作品の調査を許諾いただきました大谷みち子様にご心より御礼申し上げます。

《写真》

- 写真① 茶地松皮菱取りに秋草文刺繍小袖
（大阪歴史博物館蔵、鴻池善右衛門氏寄贈）
- 写真② 紅地流水に遠山桜文刺繍打掛（同前）
- 写真③ 紙子羽織（同前）
- 写真④ 和紙製題箋
- 写真⑤ 和紙製題箋の角印（部分）
- 写真⑥ 日本美術協会大阪支会奨励会員名簿
名物裂と裂筆筭
- 写真⑦ （大阪府立中之島図書館蔵「第一回名家秘藏品展」図録収載）
- 写真⑧ 男物紙子羽織 裏紅海黄 ヒダ絹縮物
（大阪府立中之島図書館蔵「第二回名家秘藏品展」図録収載）
- 写真⑨ 男物しぢら織紺立縮一重物 揚羽蝶織紋（同前）
- 写真⑩ 女物薄紅縞子遠山二桜模様縫打掛 裏紅海黄（同前）
- 写真⑪ 女物茶地絹白縞子松皮菱縫込秋草模様刺繍打掛 裏紅海黄松皮菱縫込秋草模様刺繍（同前）
- 写真⑫ 女物格子蘭菊純子地斗帳桜模様刺繍打掛 裏紅海黄（同前）
- 写真⑬ 男物茶地絹のしめ衿着物 裏薄水色海黄（同前）
- 写真⑭ 「明治三十五年 八番蔵道具出入扣 執事」（同前）
- 写真⑮ 「明治三十六年一月調 博覧会出品扣 執事」（同前）
- 写真⑯ 「八番蔵道具出入扣」に見える名物裂に関する記載
- 写真⑰ 「博覧会出品扣」に見える服飾品の出陳に関する記載
- 写真⑱ 「博覧会出品扣」にみえる服飾品の出陳に関する記載の直前の割書
- 写真⑲ 赤地几帳文繡絞振袖（大阪歴史博物館蔵、鴻池善右衛門氏寄贈）
- 写真⑳ 「大阪鴻池家 御秘藏品 時代衣裳展覧会 並歴代名家筆末廣陳列会」
（鴻池合資会社資料室蔵）

《附表》

《表①》 博物館施設の設立と「コレクション」の寄贈

《表②》 「臨幸記念 名家秘藏品展覧会図録」にみる出品作品のカテゴリ

《表③》 昭和七年陸軍大演習 行在所天覧品(工芸品)

《表④》 「第一回名家秘藏品展」鴻池家出品作品一覧



写真①



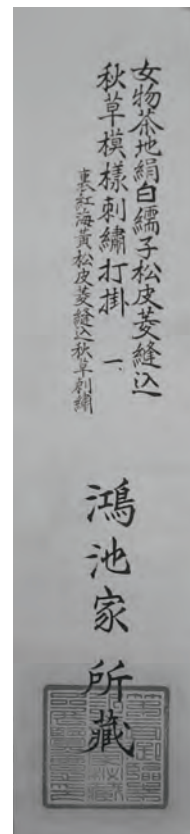
写真②



写真③



写真⑤



写真④



写真⑧



写真⑦



写真⑩



写真⑨



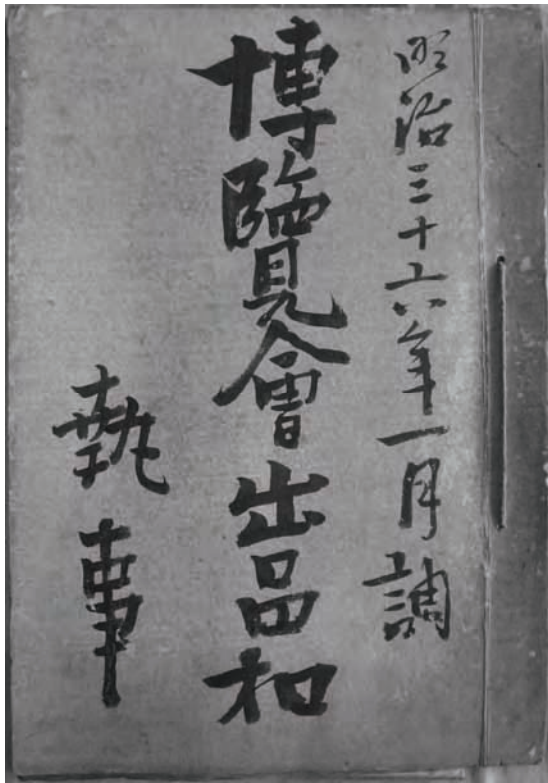
写真⑫



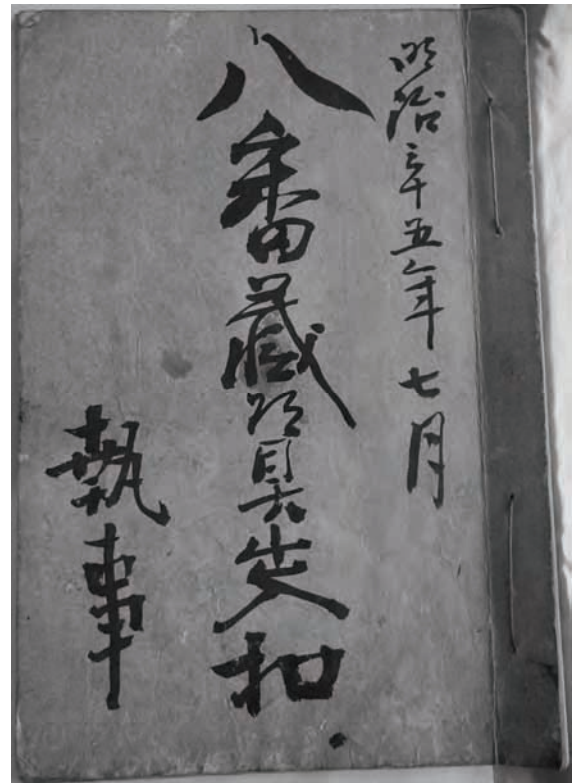
写真⑪



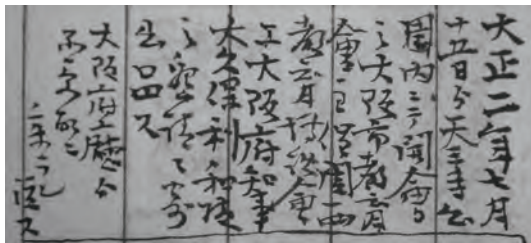
写真⑬



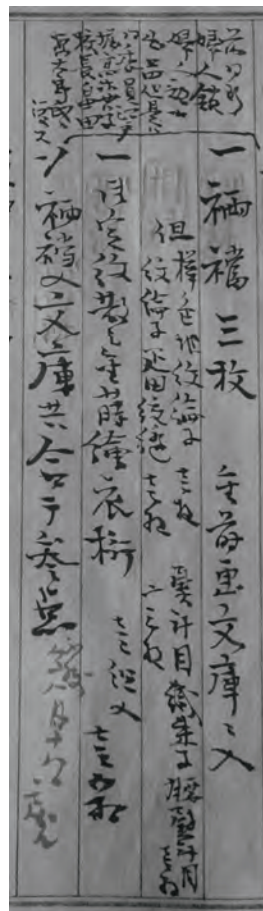
写真⑮



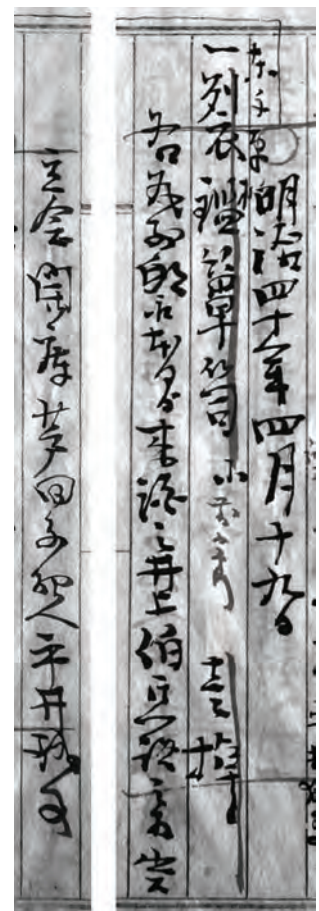
写真⑭



写真⑱



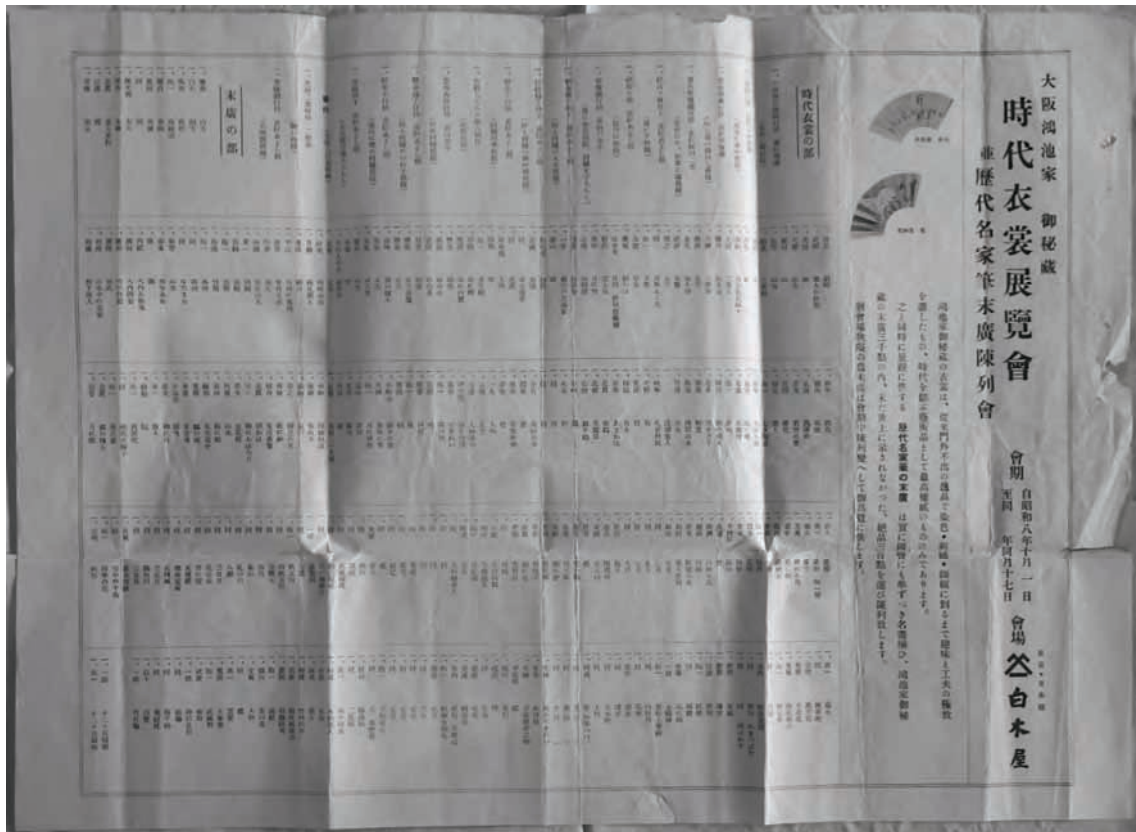
写真⑰



写真⑯



写真⑱



写真⑳

《表① 博物館施設の設立と「コレクション」の寄贈》

所蔵先	博物館施設の設立	管理	寄贈	その他
村山家	香雪美術館			
上野家		公益財団法人仏教美術研究上野記念財団	京都国立博物館 (上野コレクション)	公益財団法人仏教美術研究上野記念財団
磯野家				
野村家	野村美術館	公益財団法人野村文華財団		公益財団法人野村文華財団
山口家	滴翠美術館			
藤井家	藤井斉成会有鄰館	公益財団法人藤井斉成会有鄰館		公益財団法人藤井斉成会有鄰館
鴻池家		文書は鴻池合資会社資料室	京都国立博物館 ・大阪市・東大阪市	「松筠亭藏品」の売立(1940)
阿部家			大阪市立美術館 (阿部コレクション)	蒐集品一括寄贈
弘世家				
住友家	泉屋博古館	公益財団法人泉屋博古館文書は住友史料館	大阪市立美術館 (住友コレクション)	

《表② 「臨幸記念 名家秘藏品展覧会図録」にみる出品作品のカテゴリ》

所蔵先	《第1回》 出品の有無	カテゴリ	《第2回》 出品の有無	カテゴリ
村山家	○	絵画(日本/江戸時代)	×	
上野家	○	絵画(日本/江戸時代・近代)	×	
磯野家	×		○	工芸(日本/江戸時代/陶器・漆器) 絵画(日本/江戸時代)
野村家	○	絵画(日本/江戸時代) 工芸(日本/江戸時代/陶器・漆器)	○	武器武具(日本/江戸時代)
山口家	○	工芸(江戸時代/陶磁器)	○	絵画(日本/江戸時代)
藤井家	○	絵画(中国) 工芸(中国/陶磁器/漆器/彫刻)	○	工芸(日本/江戸時代/能装束) 絵画(日本/江戸時代) 絵画(中国)
鴻池家	○	工芸(日本・中国/名物裂)	○	工芸(日本/江戸時代/服飾)
阿部家	○	絵画(中国)	○	絵画(日本/近代)
弘世家	○	絵画(日本/江戸時代)	○	絵画(日本) 工芸(日本/江戸時代/金工)
住友家	○	工芸(日本/武具)	○	工芸(日本/江戸時代/漆工)
博物場	○	絵画(日本/江戸時代) 工芸(日本/江戸時代/陶器)	○	書(日本/近代)

《表③ 昭和七年陸軍大演習 行在所天覧品（工芸品）》

項目1	項目2	頁	段	買上	品名	作者	通し番号
二、工芸品	イ、金工品ノ部	127	2		唐銅製八角風炉付真形釜	大國栢齋	1
					白銅製鷺透シインクスタンド	大國壽郎	2
					錫製菊形湯沸	朝倉権一	3
					錫製菓子盛器	松澤甲子太郎	4
					鉄製菊象眼唐櫃形小箱	前川紀一郎	5
					銀製菊彫手釦	平松礼蔵	6
				◎	白銅製飛魚文花瓶	根箭忠次郎	7
					錫製水盤	中村半兵衛	8
					錫製花生	田中好光	9
					打出素銅瓢形萇セット桑材盆付	大森長兵衛	10
					綾杉伝菖蒲造太刀	沖本岩吉	11
					若松ニ梅ノ地文丸釜	角谷與子松	12
					銀製丸形雲鶴彫香炉	山口丹金株式会社	13
				◎	鑄銅線文花瓶	中島豊次	14
					銅製馬置物	松木外造	15
					唐物文様瓶掛五徳付鉄瓶	角谷辰治郎	16
					兜形抹茶釜	北野宗三郎	17
					銅製一輪生	中島光雄	18
					銀製大阪城模型置物	株式会社 尚美堂	19
					鍍銀萬能高坏台	小野助十郎	20
					白銅製直曲構成インクスタンド	佐藤 馨	21
				◎	銀製吊花盛器	伊藤幸市	22
				◎	黒臙銀製 菊文様建水	飯田仁三郎	23
					鑄造寿老置物	高尾銅器合名会社	24
	◎		錫漆蝨色塗青貝文花瓶	島野新太郎	25		
	◎		乾漆製抹茶用灰炮烙	吉田光太郎	26		
			龍文蒔絵進物盆	山内安次郎	27		
	◎		高蒔絵葛家形香盆	安原勝守	28		
			偉慈粉塗 電気スタンド	守田庄平	29		
			蝨色桜楓山水蒔絵二重小箱	田中合名会社	30		
			竹製蒔絵生花道具容器	吉崎善三郎	31		
			乾漆瓜形花瓶	武石理一	32		
			蝨色塗平卓	丹後吉造	33		
			近江八景蒔絵香盆	内原総之助	34		
	◎		青貝入若松椿蒔絵抹茶用棗	川端佐七	35		
	◎		青貝入七面鳥蒔絵手箱（後庭）	越田 貢	36		
	◎		桐製色紙張手箱	中原元助	37		
	◎		栃杵材茶箱	蘆田眞七	38		
	◎		桐製組立抹茶棚用（銘九重）	三好彌次兵衛	39		
			炭斗飾（附属品付）	坂田作治郎	40		
			船板材釣瓶形花器	南部伊兵衛	41		
			紫檀製 巻煙草入セット	西尾重行	42		
			紫檀製輪花形高卓	株式会社藤井唐木店	43		
			革張彩漆華 文手箱	宮本忠平	44		
			路易式ベニヤ製茶卓子	内外木材工芸株式会社	45		
	◎		蝨色塗ピアノ型 文具箱	井川友七	46		
	◎		桜楓材 新型鏡台	合名会社内田箆店	47		
			桐製 松竹梅風呂先屏風	木寺治三郎	48		
	◎		桑材檜扇棚	楠 喜太郎	49		
			総二重象牙脚附琴	大竹栄次郎	50		
	ロ、漆工品ノ部		3				
	ハ、木竹工ノ部						

ニ、彫刻ノ部	128	1	◎ 桑材短冊入硯箱	楠 正一	51			
			玉椿材文台硯箱	井口萬次郎	52			
			編竹製盛物籃 (銘名月)	田邊常雄	53			
			竹製 烏帽子兜形煙草入	松田鉄太郎	54			
			編竹製 電気スタンド	田邊愼三郎	55			
			編竹製 盛物籃	前田房次郎	56			
			編竹製 四環耳付壺形花籃	早川廣三	57			
			竹網代編壽字文盆	江殿巳之助	58			
			◎ 編竹製 圓式花文盛物籃	坂口 要	59			
			◎ 編竹製 六稜式鉄線文茶壺	鈴木喜一	60			
			編竹製 高坏形菓子器	豊西金吉	61			
			編竹製 方式末廣花籃	山本太助	62			
			編藤製 唐物模中置炭斗	山本武貞	63			
			煤竹製 蘭花陽刻帯締	奥田栄吉	64			
			バローバス材四方式干菓子盆	利山米次郎	65			
			竹製 般若心経彫香筒	酒井久彦	66			
			◎ 木彫住吉人形翁置物	田中主水	67			
			ホ、窯業品ノ部	2		牙木応用彫刻 学童置物	和田彌太郎	68
古材桐葉文香合	灘波鹿三	69						
牙彫着色 枝柿文鎮	澤木利三郎	70						
◎ 紫掛カットグラス洋酒セット	森高和吉	71						
◎ クリスタルカットグラス赤色花器	株式会社島田硝子製造所	72						
瑠璃色カットグラス平皿	赤松栄七	73						
薩摩地 神田祭絵附花瓶	藪 恒夫	74						
陶製 果実	岩崎安貞	75						
ハ、紙工品ノ部						短冊貼	水野美一	76
						婦人持扇子 (歐洲向、内地向)	稲垣政七	77
			軍扇置物、大阪懐古扇子	久保田與市	78			
			金砂子蒔硯屏	樋口彦右衛門	79			
			羊毛緞通	吉田鹿之助	80			
			◎ リボン刺繍ハンドバック	三田静代	81			
			金華山織	住江織物株式会社	82			
			◎ リボン刺繍手提バック	清水コキク	83			
			蠟染刺繍入糸瓜棚文テーブルセンター	赤松清三郎	84			
			富士絹友禅 (日萬萬歳)	株式会社田村駒商店	85			
ト、染織品ノ部			倭刺繍卓布	横山三郎	86			
			◎ モスリン友禅 (帯側)	株式会社伊藤萬商店	87			
			正倉院御物模樹皮色綴織成丸帯地	龍村平蔵	88			
			刺繍卓被	松山彌五郎	89			
			◎ 瑠璃製スワソ帯止	林田伊三郎	90			
			瑠璃珠首飾	依田新右衛門	91			
			ゴード革製ハンドバッグ	杉江新兵衛	92			
			◎ 玩具照リト降り	伊達佐一郎	93			
			チ、小間物ノ部	3		摘ミ細工玩具 (花車、宝船、鯛車)	山田久治郎	94
						金砥合製欧米向デスクセット及写真立	株式会社 山中商会	95
十八金縄目彫刻金縁眼鏡	梶 彦兵衛	96						
左記ハ天覧品ニアラザルモ特ニ御買上ノ光荣ニ浴シタルモノナリ。								
			◎ 象牙菊彫帯締	湯浅千代三郎				
			◎ 錫胎亜字式七宝文花瓶	島野新太郎				
			◎ 切子硝子平皿	赤松栄七				
			◎ 蓑セット	吉田岩平				
			◎ 瑠璃唐船彫帯締	湯浅千代太郎				

《表④ 「第一回名家秘藏品展」 鴻池家出品作品一覧》

頁	内容	所在確認	頁	内容	所在確認
1	書付	個人蔵	9	不明	未詳
	裂箆笥	個人蔵	10	剣先	個人蔵
	文庫	未詳	11	金地宝珠千仏体 (2カット)	個人蔵
2	法隆寺裂	未詳	12	不明 (2カット)	未詳
3	興福寺	個人蔵		大鶏頭 (2カット)	個人蔵
	不明	未詳	13	長楽寺 (2カット)	個人蔵
4	茶入 (2カット)	未詳		大燈 (2カット)	個人蔵
	名物米市金襴 (2カット)	個人蔵	14	雪ノ下 (2カット)	個人蔵
5	白極 (2カット)	個人蔵	15	芳野 (2カット)	個人蔵
6	正法寺 (2カット)	個人蔵		鎌倉 (2カット)	個人蔵
	本能寺 (2カット)	個人蔵	16	弥三右衛門 (2カット)	個人蔵
7	藤種 (2カット)	個人蔵		望月 (2カット)	個人蔵
	宗薫 (2カット)	個人蔵			
8	珠光 (2カット)	個人蔵			
	道元 (2カット)	個人蔵			

Research on the Background of the "Exhibition Commemorating the Imperial Visit" and the Decision by the Konoike Family to Exhibit Textiles

NAKANO Tomoko

This study began with a cut-out survey caption that came with the Kosode that Osaka Museum of History was donated by Mr. Konoike Zenemon. These captions were used in "Exhibition Commemorating the Imperial Visit", that was held in 1934 and 1933. I examined the background of the holding of the exhibition at the beginning. Then I examined Kosode and textiles exhibited from Konoike family. I also reported about handed down of these objects. At the end of the document, I have also proposed a new point of interest necessary to research the history of arts and crafts to Showa prewar period from the late Meiji period.